

特集

「小5 統一合判」²

中学入試レポート vol.

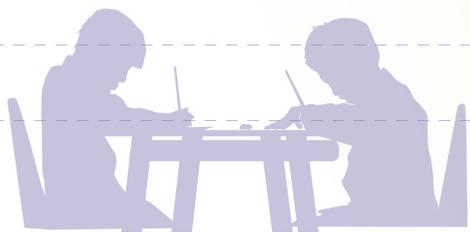
私学が育てる人間力！

進学実績や学習指導だけじゃない、
さまざまなフィールドで活躍する
私立中高一貫校の生徒たち！

今回で2回目を迎えた小5「統一合判」テスト。大勢の仲間が集い力を競う、こうした会場テストの雰囲気や形式に、はじめて触れた受験生も多かったことでしょう。

2020年2月の入試本番までは、まだ1年半近くありますが、気を抜くことなく、じっくりと「骨太」の学力を養成し、受験勉強が本格化する6年生に向けて、はずみをつけてください。

今回の入試レポートでは、今後の学校選びのためのひとつの視点として、進学実績や学習指導以外の分野でも活躍する「私立中高一貫校の多様な活躍と成果」を紹介。さまざまな分野で躍動を続ける私立中高一貫生と卒業生たちについてお伝えします。



首都圏模試センター

私立中高一貫校が多くの保護者から 選ばれている理由とは！？

日本の義務教育では、無試験、無学費で近隣の中学校に通えるにもかかわらず、なぜ多くの小学生親子が、低学年から塾に通い、きびしい中学受験を乗り越え、私立中高一貫校への進学をめざしているのでしょうか。難関大学への進学実績が良いから？環境や設備が充実しているから？それとも教員たちの熱意が素晴らしいからでしょうか。

私立中高一貫校には、創立者が掲げた理想の教育（＝独自の教育理念）のもと、その考えに賛同した家庭の子女が集うことで形成された、独自の風土があります。そこで展開される「自由で、柔軟な教育の展開」こそ、いまなお多くの小学生親子を魅了し続ける最大の理由なのです。そのうえで、各私学が個性的な教育プログラムを工夫し、新たな時代に求められる力を育ててくれるのが、私立中高一貫校の教育なのです。

12歳から18歳の6年間は、人生のうちで最も多感で大切な時期。人間性の基礎はこの6年間で形成されます。この中高6年間のなかで、学力的にも人間的にも大きく成長するためには、何より「中学1～2年が大事」と言われています。

この中高生活のスタートラインにあたる「基礎期」に、わが子がより良い教育環境で学校生活に馴染み、伸び伸びと自主的に学びながら、友だちや先生と一緒に健やかな学校生活を送ることができれば……。これが中学3年～高校1年の「充実期」や高校2年～3年の「発展期」において、大きく成長するための確かなベースになるのです。

この大切な時期に高校受験で分断されることなく、一貫した考えのもとで個々の生徒を見守り、育ててくれるのが私立中高一貫校です。じっくり



過去に全国を5度制している
山のラグビー部。◎国学院久我

と自分と向き合い、将来の進路を含めた“生き方”を考えるための時間的ゆとりも生まれます。

まさに、こうした一貫性、持続性を持つ教育環境ならではの利点こそ、多くの小学生の保護者があえてわが子の進路に私立中高一貫校を選ぶ最大の理由なのです。

大学進学実績の良さは、各私学がめざす 「全人教育」の副産物

私立中高一貫校や中学受験の話題がマスコミ等で取り上げられるときには、先にも述べたような「大学進学実績の良さ」に焦点をあてたものが目立ちます。実際、2018年の「東京大学合格者ランキング」を見ると、37年連続首位の●開成を筆頭に、今年は上位7校が私立中高一貫校でした。

このことは、多くの小学生親子や、世間の人々に広く知られていることであり、この事実が公立学校に対する大きなアドバンテージとなっていることは間違いありません。

しかし、私学が目指しているものは、この点だけではありません。豊かな「学力」と「人格」、そして「個性」と「社会性」を兼ね備えたバランスある人間作りなのです。

※本文・コラム文中の、●＝男子校、●＝女子校、◎＝共学校



特集 私学が育てる人間力！

進学実績や学習指導だけじゃない、さまざまなフィールドで活躍する私立中高一貫校の生徒たち！

これまでも私たちは、私学の中高6年間一貫教育の特質を①独自の理念と教育方針を持つ、②中高の一貫した教育環境と設備がある、③有機的に再編されたカリキュラムがある、④6年間の継続性・連続性を活かす指導がある、⑤入学してきた生徒と保護者、そして教員が一体となり、協力体制がある、⑥大学への進学が見通せる、⑦大学への受験・進学はバランスのとれた人間教育（全人教育）の副産物としての成果である、……と理解してきました。

つまり、個々の生徒が各自の理想や目標につながる進路や職業を選ぶときに、大学や大学院で学んだ経験が、希望を実現するための近道になる。ならばそういう生徒の希望を後押しするために、「大学受験にも立ち向かえる力を中高6年間でじっくり育てよう」というのが、多くの私立中高一貫校の基本姿勢でもあるのです。

いずれにしても、私立中高一貫校の大学進学実績が、大半の公立高校と比べて格段に優れていることは広く知られています。じつはこうした成果につながる中高6年間一貫教育のノウハウを私学に学び、公立学校を選択したい生徒たちにも提供するために設置されたのが、現在までに全国に設置され、近年大きな注目を集めている公立中高一貫校なのです。

もちろん大学への進学状況（実績や進路指導スタイル）や6年間の学習指導が、学校選択のうえで大きな比重を占めていることは否定しません。しかしこれからわが子の進路を考えていく保護



「オーストラリアアマチュアゴルフ選手権」で見事に優勝した●共立女子第二の山口すず夏選手。今後の活躍がますます期待されます。

者の皆さんには、それ以外の「幅広い私学の成果」にもぜひ目を向けていただきたいのです。

そうすることによって、「進学実績や学習指導だけではない」私立中高一貫校の（生徒や卒業生たちの）多様な活躍や成果が、大学進学実績以上の魅力をもって感じられることでしょう。

継続した中高6年間の時間的余裕が、私立中高一貫校の大きな魅力

「高校受験がない」ことによる時間的余裕と中高の継続性は、私立中高一貫校の大きなメリット。教科の学習だけではなく、「行事や課外活動、好きなことや部活動などに思い切り打ち込める」ことも大きな魅力と言えるでしょう。

人生のうちで最も多感で成長著しい、12歳から18歳の6年間。人間性の基礎は、この6年間で形づくられる部分がとても大きいのです。

この大切な時期に、高校受験で分断されることなく、一貫した考えのもとで個々の生徒を見守り、育ててくれる私立中高一貫校では、生徒自身がじっくりと自分と向き合い、将来の進路を含めた自分自身の生き方を考えるための気持ちの余裕も生まれます。

そうした時期に自らの意思で好きなことに打

※本文・コラム文中の、●=男子校、●=女子校、○=共学校

ち込むことで、生徒は自尊感情や目的意識、学校生活へのモチベーションを高めることができ、同時にこれらの活動を通じて、他者への理解や協調・協働する力を身につけていくことができます。

一方の教科学習においても、大学受験に必要な教科（英・数・国・社・理）だけではなく、美術や音楽、技術、体育、家庭科などの教科を通じて、豊かな情操や感性を育てることができます。

とくに私学のなかでも昔から人気の高い伝統校では、主要5教科の学習以上に、こうした側面（美術、音楽、技術、体育、家庭科など）で充実した授業や課外活動、発表の場を多数設けています。

また教科学習の枠組みにとどまらず、平和教育、環境教育、異文化理解教育など、今後の社会でますます必要になってくる知識や理解力を深める機会も、私立中高一貫校の多くが積極的に取り組んでいることです。

こうしたさまざまな側面における幅広い教育や活動を総合的、有機的に結びつけることで、初めて私学の中高6年間一貫教育が形成されているのです。

そして、すでに多くの私立中高一貫校で実践・実現されてきた、これらの「総合的、有機的な」学習や活動、体験の機会を通して育むことのできるものこそ「2020年大学入試改革」に十分に対応できる力であり、中高～大学を卒業して社会に出たときに必要とされる、総合的な学力と人間力（共生・協働・協調できる力とコミュニケーション力）でもあるのです。

また中高の6年間の継続性と時間的なゆとりを活かして、身の回りのもの（自然や社会の出来事）を観察し、先生や仲間とさまざまなテーマで話し合い、自らの頭でじっくりと考え、それを人に

伝える力を育むことができるのも「中高6年間一貫教育」の最大の利点と言えるでしょう。

そして、いま教育現場への課題とされる「アクティブラーニング」や「学び合い」の授業、オールイングリッシュによる英語以外の教科の授業（イメージ教育）なども、まだ頭と感性の柔軟な中学1年生から慣れ親しむことで、子どもたちにとっては、より吸収・消化しやすいものになることは、言うまでもありません。

この夏に私立中高一貫校が見せてくれた、 スポーツの成果！

中高一貫校の時間的なゆとりは、部活動や学校行事においても活かされていることは先にも述べましたが、今年も多くの大会やイベントでその成果を見せてくれました。

年末から年始にかけては、この時期の風物詩「第97回全国高等学校ラグビーフットボール大会」が東大阪市の花園ラグビー場で行われ、首都圏の私立一貫校から●茗溪学園、●昌平、●目黒学院、●国学院久我山、●桐蔭学園が出場しました。惜しくも全国制覇はなりませんでした。が、国学院久我山（過去優勝5回）は準々決勝、



「2018東京都アメリカンフットボール大会」
決勝で激突した●倭成学園と●足立学園。

※本文・コラム文中の、●=男子校、●=女子校、○=共学校



特集 私学が育てる人間力！

進学実績や学習指導だけじゃない、さまざまなフィールドで活躍する私立中高一貫校の生徒たち！

桐蔭学園は準決勝まで進み、名門校の実力を発揮してくれました。

同じく1月に行われた「オーストラリアアマチュアゴルフ選手権」には、昨年の「全国高校ゴルフ選手権春季大会女子個人の部」では優勝した●共立女子第二の山口すず夏選手が出場。日本人による初の大会制覇の偉業を達成しました。過去に全米女子オープンに日本選手としては史上最年少(14歳)で出場した経験を持つ山口選手。プロ顔負けのプレーでまたひとつ、大きな勲章を手にすることができました。

5月に行われた「2018東京都アメリカンフットボール大会」決勝では●佼成学園と●足立学園の男子校同士が対決、38-7で佼成学園が勝利し、見事に大会2連覇を達成しました。年末に行われる全国高校選手権「クリスマスボウル」での3連覇に向け、順調な調整が進んでいます。

この夏、東京で開催された第13回パンパシフィック水泳選手権大会。ここには◎淑徳栄鴨3年の池江璃花子選手と◎武南の酒井夏海選手が出場。池江選手は8種目12レースに出場し、個人では女子100Mバタフライにおいて56秒08の日本新記録で金メダルを獲得。さらに女子200M自由

形でも銀メダル、リレー種目でも二つのメダル獲得に貢献しました。また女子100M背泳ぎに出場した酒井選手は、59秒33の高校新記録を樹立して6位入賞。若い二人が、2020年の東京五輪に向けて弾みをつけました。

同じく、高校生たちによるスポーツの祭典「平成30年度全国高等学校総合体育大会(インターハイ)＝東海総体2018」も7月26日～8月20日までの日程で開催されました。陸上競技の花形男子100Mでは、◎城西大城西の塚本ジャスティン惇平選手が10秒43の好タイムで優勝。昨年2位の雪辱を見事に果たしました。他のトラック競技では◎相洋が大活躍。男子800Mではクレイアーロン竜波選手、女子400Mでは高島咲季選手が共に優勝。高島選手は女子4×100Mリレーでも1位に輝く活躍を見せました。また男子4×100Mリレーでは◎八王子学園八王子、男子4×400Mリレーでは◎法政大第二がそれぞれ優勝。関東勢の強さが目立ちました。

ハンドボール女子では●佼成学園女子が決勝で沖縄の浦添商業を破り、2年連続4度目の優勝を達成。3月の全国選抜大会の雪辱を果たしました。

テニス男子では◎秀明八千代の白石光選手が



2年連続4度目の「インターハイ」優勝を達成した●佼成学園女子のハンドボール部。

※本文・コラム文中の、●=男子校、●=女子校、◎=共学校

シングル・ダブルス・団体の3冠を制覇。3月の第40回全国選抜高校テニス大会優勝に続く快挙を達成しました。

ソフトテニス女子では◎文大杉並の小林愛美選手と原島百合香選手のペアが優勝。同校の先輩でもあり、昨年・一昨年と2連覇を達成した林田リコ選手と宮下こころ選手ペアに続くことができました。

相撲では角界にも多くの力士を送り出しているこの競技の絶対王者◎埼玉栄が大活躍。個人では3年生の斎藤大輔選手が準決勝・決勝と劣勢を覆して高校横綱に！団体戦でも豪快な上手出し投げを決めて、同校を優勝に導きました。

また埼玉栄はバドミントンの男子学校対抗でも1位を獲得。スポーツ強豪校としての実力を各競技で発揮してくれました。

サッカー男子では◎桐光学園と◎昌平が準決勝で激突。3-2の接戦で桐光学園が決勝に進みましたが、延長戦で山梨学院に1点を奪われ、惜しくも準優勝に終わりました。

女子の新体操団体には千葉の◎昭和学院が出場し、ほぼ完璧な演技を披露。19.800点という驚異の高得点を叩き出し、2016年第2位の雪辱を見事に果たしました。

インターハイ同様、毎年多くの感動を与えてくれるのが高校野球選手権大会（2018夏の甲子

園）です。今年は100回目の記念大会ということもあり、例年以上の盛り上がりを見せました。西東京大会では◎日本大学第三が劇的なサヨナラ2ランで5年ぶりの出場権を獲得。他にも茨城の◎土浦日大や南神奈川の●横浜が代表となり、熱戦を展開してくれました。

中学校のスポーツ界でも、先にも述べた「高校受験がない」利点を武器に、各種の全国中学校選手権大会や都道府県の予選大会で、私立中高一貫校が活躍を見せています。

もちろん公立中学校でもがんばっているチームはたくさんありますが、高校受験のための準備に時間を取られることなく、中学3年の夏の大会まで、好きなことに打ち込める意義とアドバンテージは、非常に大きいと言えるでしょう。

文化部も負けていない！ 私立中高一貫校の多様な成果

私立中高一貫校の部活動の活躍は、運動部だけではありません。体格や運動能力で差がつくことが少なく、中学生と高校生が合同で活動する例が多い文化部のほうが、むしろ全国的な活躍が目立つ、という見方もできます。

各都道府県の代表チームが、理科・数学・情報における複数の分野で競う「科学の甲子園」。今年の各都道府県選抜には過去最多となる698校・8725名がエントリーしました。3月に行われた本大会には、代表の47校361名が出場。筆記競技と3つの実技競技を合計した成績の結果、神奈川の●栄光学園が初優勝。3位にも●筑波大駒場が入るなど、名門両校が高い評価を獲得しました。

6月に行われた「第35回NHK杯全国中学校放



「第35回NHK杯全国中学校放送コンテスト」東京電機大学の放送部において優勝を果たした◎東京電機大学の放送部。



特集 私学が育てる人間力！

進学実績や学習指導だけじゃない、さまざまなフィールドで活躍する私立中高一貫校の生徒たち！

送コンテスト東京都大会」では◎東京電機大学がラジオ部門で優勝、朗読部門でも3位に入り、全国大会への切符を獲得しています。

人気漫画「ちはやふる」の映画化などでも注目を集めた競技カルタ。想像以上に気力と体力を消耗することから、世間では「畳の上の格闘技」と表現されるほど、見るものを熱くする戦いが展開されます。

7月に行われた「第40回全国高等学校小倉百人一首かるた選手権大会」では埼玉の●浦和明の星が男女混合戦を勝ち抜き初優勝。第4位には●海城も入り、こちらも関東勢の層の厚さを見せてくれました。

「文化部のインターハイ」と呼ばれる「全国高等学校総合文化祭（2018信州総文祭）」はこの夏で42回目の開催。文化部の生徒たちにとっては日頃の練習や研究の成果を発表する絶好の機会となっています。

弁論部門では●玉川聖学院の3年生が総合2位で優秀賞（文化庁長官賞）を獲得。また軽音楽部門でも◎国際学院が2位の優秀賞に輝いています。

藤井聡太7段の活躍で注目を集める「将棋部門」では男女の個人で●攻玉社の1年生と◎広尾学園の2年生がそれぞれ優勝。首都圏私立中高一貫校の活躍が目立ちました。

同じくこの夏に行われた合唱の「第85回NHK全国学校音楽コンクール東京都本選」では、●豊島岡女子学園と●大妻中野が中学校・高等学校の部でそれぞれ金賞を受賞。同じく●頌栄女子もそれぞれのカテゴリーで銀賞を受賞しています。また大妻中野は昨年の10月に行われた全国コンクール（高等学校の部）でも金賞に輝いており、今年の活躍も期待されています。

8月上旬に行われた「第23回全国・中学・高校ディベート選手権」（ディベート甲子園）の高校



今年の「NHK全国学校音楽コンクール東京都本選」で金賞に輝いた●大妻中野の合唱部は全国大会の常連！

の部では関東の私立中高一貫校が上位を独占。優勝の◎開智を筆頭に、準優勝の◎創価、第3位の●開成（中学の部・準優勝）と層の厚さを見せつけてくれました。

これまでにあげた例はほんの一例ですが、他にも、吹奏楽、管弦楽、マーチングバンド、美術、漫画、生物、化学、物理、放送、ラジオ、鉄道研究、コンピュータなど、さまざまな文化部が全国レベルの活躍を見せています。

このように運動部・文化部に関わらず、誰もが自分の好きなことに打ち込むことができ、しかも高いレベルでの活躍や成果を出すことも、私立中高一貫校の大きな特色なのです。

こうした継続的な6年間の部活動を行うことのできる環境と熱心な顧問の先生（専任教員なら転勤することはない）や指導者（OBのつながりや支援力も強い）の存在。それが長くても10年毎に転勤を余儀なくされる公立中学・高校と私立中高一貫校の大きな違いと言えるでしょう。

学校の枠や国境を越えた大会や催しでも、私立中高一貫校の生徒が大活躍！

スポーツの中体連や高体連、さらに文化部での各種団体が主催する中高の大会や発表会だけ

※本文・コラム文中の、●=男子校、●=女子校、◎=共学校

ではなく、学校の枠や国境を越えた大会や発表会、コンクールなどでも、私立中高一貫校の生徒たちが多彩な活躍を見せています。

世界の高校生が国連会議を模して国際問題を討議する「模擬国連」にチャレンジする私立中高一貫校も年々増加。5月に行われた「第12回高校模擬国連国際大会」では●海城が優秀賞を受賞。他にも◎渋谷教育渋谷と●頌栄女子が優秀賞を獲得するなど、私立中高一貫校でのグローバル教育のレベルの高さを反映する結果となりました。

この7月にシンガポール国立大学（NUS）で開催されたグローバル・リンク・シンガポール2018（GLS2018）には◎安田学園の生物部が日本代表として出場。GLSは、アジア地域の中高生が科学や国際課題に関する考えや研究成果を、英語を使って発表するアイデアコンテスト。前年の「第61回日本学生科学賞」に出品した都市養蜂の研究成果が「読売新聞社賞」を受賞した経緯からの出場となりました。

またこの夏の開かれた「第59回国際数学オリンピック・ブラジル大会」では●開成と●筑波大駒場の2人がそれぞれ銀メダルを獲得。首都圏男子最難関校の実力を示してくれました。

8月に東京国際展示場で開催された「第10回全国高等学校鉄道模型コンテスト」には例年以上

の力作が集結。花形のモジュール部門では◎関東学院六浦の作品が7年ぶり3度目の最優秀賞（文部科学大臣賞）を受賞。同校は11月にドイツで行われる鉄道ジオラマの大会「第13回ヨーロッパNスケールコンベンション」（バーデン＝ヴュルテンベルク州シュツットガルトで開催）にも招待され、受賞作も出品される予定となっています。

国際的に活躍できるグローバル・リーダーの育成をめざす高等学校として文部科学省から指定される「スーパーグローバルハイスクール（SGH）」。その課題研究の発表会「SGH甲子園2018」も3月に実施されています。「研究成果ポスタープレゼンテーション部門」では◎順天が優秀賞を受賞。「ラウンドテーブル型ディスカッション部門」では●富士見丘が優秀賞を受賞し、昨年の「英語プレゼンテーション部門に続いて2年連続となりました。

他にも文部科学省と民間企業が協力して、意欲と能力ある若者たちの留学を支援する「トビタテ!留学JAPAN」など、近年は学外プログラムへの参加を積極的に推奨する私立中高一貫校が増えています。

ここまで紹介してきた活動は、ほんの一例であり、他にも私立中高一貫校の活躍は多岐に渡ります。しかし、本来の私立中高一貫校の教育の目的は、中高6年間のゆとりを最大限に活かすことで得られる高い学力と、その過程で培われる豊富な人間力の育成にあり、今回ご紹介した“成果”はあくまで「プラスアルファ」（副産物）にすぎません。

受験勉強が本格化する小5の今だからこそ、私立中高一貫校に我が子を通わせる意義を考え、進学実績や学習指導以外の魅力にも目を向けてみてください。

※本文・コラム文中の、●=男子校、●=女子校、◎=共学校

